

「繰り返される掛唄：唄を支える韻律と唄を生み出す工夫」

梶丸岳
(京都大学)

1. はじめに

秋田県には「掛唄」と呼ばれる掛け合い歌がある。この芸能はかつて江戸時代に神社で行われていた「お籠り」という儀礼に伴う宴会の余興として始まったとされ、現在は秋田県的美郷町にある熊野神社で8月23日夜に「全県かけ唄大会」が、横手市にある金澤八幡宮では9月14日夜から15日未明にかけて「金澤八幡宮伝統掛唄大会」が、例年それぞれ保存会の主催で開かれている。2020年はコロナ禍の影響でどちらも中止となってしまったが、熊野神社の方は11月1日に「全県オンラインかけ唄大会」として小規模に行われ (<https://youtu.be/DkFVGo54--k>)、金澤八幡宮の方は11月8日に地元で開催された「金沢伝統芸能フェスタ」で歌手を集めて掛け合いが披露された (https://www.youtube.com/watch?v=I5YuWd_VL_U)。

掛唄はもともこの地方で広く歌われていた仙北荷方節という祝い唄の旋律に、即興で原則として7・7・7・5の歌詞をつけて唄を掛け合う（この音数律は近世調などとも呼ばれる、江戸時代に流行した形式である）。かつて評論家の草柳大蔵が熊野神社の大会を見て歌手たちを「即興詩人」と評したが（安倍ほか 2003）、歌詞を見てみると必ずしも詩として技巧が凝らされ風流な表現がなされているというわけでもなく、日常的な会話の延長線上に掛け合いがあることがわかる。たとえば次のような掛け合いである。

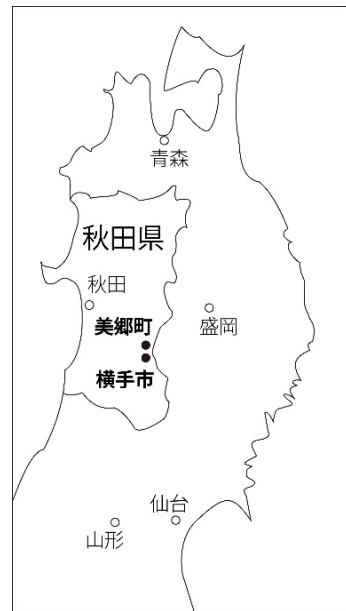


図 1. 秋田県地図

歌詞例 1：2012 年金澤八幡宮伝統掛唄大会 3 回戦より

1 TT: 還暦手前の 洩たれ小僧 名人相手に 荷方節

2 NS: 還暦過ぎたる じさまだけれど どんとぶつかって かかってこい

3 TT: いつかあなたに 追いつきたくて 今日まで頑張って 来た私

- 4 NS: それは何より 励みの言葉 俺も負けずに 歌ってゆく
5 TT: 若いみんなの パワーをもらい 今年あたりは 優勝を
6 NS: 今年優勝は 私が獲るよ 来年あたりに くれてやる



図2. 金澤八幡宮伝統掛唄大会の様子 (2019年9月15日筆者撮影)

確かに掛唄の歌詞はその場で考えて口から出た「即興詩」ではあるのだが、ここで事例に挙げた歌詞を見てみると、歌詞にはそれほど日常会話と離れた表現があるようには見えない。規範とされている7・7・7・5という音数律もほとんど守られていない。それでは、掛唄の掛け合いでは何がどのように繰り返されているのか。何が掛唄を「詩的」(Jakobson 1960)にしているのか。本発表では「響鳴」(resonance)と結束性(cohesion)という概念を手掛かりに、掛唄における反復を分析する。

2. 小規模の響鳴と結束性

「響鳴」はDu Boisの対話統語論(dialogic syntax)における基本概念のひとつである。Du Boisはこの概念を「対話における発話間に本来内在する潜在的な類似性を活性化させること」と定義している(Du Bois 2014: 372)。つまり響鳴は先行する発話もっている何らかの要素を次の話者が意識的あるいは無意識的に反復することで生じる類似性を指す。響鳴は構造、単語、形態素、音素、意味、指示物、発語内の力等あらゆるレベルで存在し、繰り返し、変形、代入、言い換え等によって実現されるような言語特性の照合プロセスであるともいえる(崎田・岡本 2010: 93-94)。

Du Boisは響鳴が現れる平行的表現を並べて、たとえば次のようにダイアグラフとして提示する。

- 1 JOANNE; yet he's still ^healthy .
 3 LENORE; he's still walking ^around ,
 (DuBois 2014: 368)

この事例は he's still が同一であり, healthy と walking around が異なる。前者は副詞で後者は動詞句であるが, Du Bois によると両者は同じ位置に入ることとともに「he (アルコール中毒だった共通の知人) の健康状態」を指すことが含意されるようになる。ダイアグラフはこうした構造的な平行性を示すことで, 両発話の類像的な関係性を析出するために用いられる。このように, Du Bois の響鳴に関する議論は意味を含むとはいえ, 分析の中心は統語構造的な平行性にあり, それが言語習得を促したり構造が表現を創発したりすることを示すことが分析の主目的となっている。

掛唄でもたとえば次のような平行性のある掛け合いが見られることがある。

歌詞例 2 : 2019 年金澤八幡宮伝統掛唄大会 2 回戦 1 組目より

5 KS: それなら たくさん 食べたいな お腹いっぱい 頂きます

6 NS: それは 何より 安心したよ お腹いっぱい 食べてくれ

歌詞例 2 は上記のようにダイアグラフとして提示することが可能な掛け合いである。この事例は 1KS「私食べるの大好きなのよ 横手焼きそばいっぱい食べたいな」, 2NS「横手焼きそば 食べたいならば お腹いっぱい ご馳走する」, 3KS「それは嬉しいな でもね実は みんな一皿 私一皿しか 食べませんよ」, 4NS「別に遠慮は いらないですよ 金ならいっぱい ある俺だ」というやり取りを受けたものである。歌詞例 2 ではどちらも先行発話を指示する指示詞で始まり, 動詞句, 副詞句, 動詞句と続いており, 明確な平行性が見て取れる。

ただ歌詞例 2 の前のやりとりや歌詞例 1 を見てもわかるように, このような構造的平行性が見られる掛け合いはほとんどない。むしろ歌詞例 1 なら「還暦」「優勝」といった単語レベルで先行発話を反復していることが多い。本発表ではこうした, ダイアグラフではうまく提示できない小さな反復を「小規模の響鳴」と呼ぶことにしよう。

小規模の響鳴は「結束性」(cohesion) として捉えることもできる。結束性とは代名詞や指示詞による指示と照応, 代用, 省略, 接続表現といった文法的要素, あるいは同義語や対義語などによる繰り返しや関連する表現の共起といった語彙的要素によって実現される, 意味的なつながりのことである (Halliday and Hasan 1976, 石橋・伝 2001)。Halliday と Hasan は例えば次のような例を挙げている。

Time flies.

—You can't; they fly too quickly.

(光陰矢のごとし／ハエの飛ぶ速度を測ってみろ。

—だめだよ。飛び方が速すぎるもの)

(Halliday and Hasan1976: 4-5; ハリデイとハサン 1997:5)



図3. 熊野神社全県かけ唄大会の様子 (2019年8月23日筆者撮影)

これは小学生のジョークであるが、このジョークにはYou can'tという省略形、theyという指示項目、flyの語彙的繰り返しによって結束性が表現されている。結束性は短文や看板の文言のように短い表現にも見出され得るが、特に文を超えて作用する結束性はテキストに整合性(coherence)を見出すための解釈のガイドとして機能する(Bublitz 2011)。ここで言う「テキスト」には会話も含まれる。

掛唄における掛け合いも、組ごとに見れば「テキスト」として捉えることができる。そして掛け合いにおいて「ちゃんと掛け合う」ためには結束性のある表現を用いることが重要になる。実際歌詞例1を見てみると、「還暦」や「優勝」といった同一語彙、「洩たれ小僧」と「じさま」という対義語などによる語彙的な結束性、さらにすでに10回以上大会で優勝しているNSを指す「名人」や「あなた」、「それ」といった指示表現による結束性が見られる。特に、同一語彙、類義語、対義語といった語彙的な結束性は響鳴と重なる現象と考えられる。

本発表では、響鳴を統語的構造の並列に基づく表現の創発としてのみならず、語彙レベルでも起きる結束性の実現と表現の創発として捉えたい。小規模の響

鳴（つまり後者）は実際掛唄において「相手の歌詞を取る」と呼ばれ、ある程度意識的に利用されている。それでは以下、掛唄においてどのような響鳴があるのかについて見ていこう。

3. 掛唄における小規模の響鳴

同語反復による小規模の響鳴については歌詞例 1 すでに見たが、他にも事例は数多くある。たとえば次の事例は「熊野神社」と「熊野境内」が類義語反復となっており、続く「伝統行事」と「掛唄祭り」はコンテキストから見て同じ対象を指している。こちらも類義語の反復になっている。つまり上の句に相当する部分が響鳴している。

歌詞例 3：2019 年全県かけ唄大会 1 回戦 2 組目より

- 1 HT：熊野神社の 伝統行事を とともに守ろうよ 力貸せよ
- 2 IS：熊野境内 掛唄祭り 初めて出たけれども 後悔してや
- 3 HT：誰もはじめは 緊張するが 一杯ひっかけりゃ 慣れるもの
- 4 IS：そうは言っても 胸がドカドカ これは絶対 病気だと思う

この掛け合いでは歌詞例 1 と同じく、3 首目で小規模の響鳴が途切れている。これは話題の転換と軌を一にしている。1 首目と 2 首目は熊野神社の掛唄祭り（＝全県かけ唄大会）が話題の焦点になっているが、IS によると口をついて出たという「後悔してや」という（半ば言い間違いのまま終わった）歌詞を受けて 3 首目で HT は（言い間違いにも表れている）IS の緊張ぶりに話題の焦点をずらしている。この特徴は歌詞例 1 にも当てはまる。ここから、響鳴は掛け合いの話題とも深く結びついていることがわかる。

ところが、同じ語が繰り返されているのに、それが同音異義語として表れている掛け合いもある。

歌詞例 4：2019 年全県かけ唄大会 2 回戦 4 組目より

- 1 Ss：鳥の名前は ハヤブサ速いよ 新幹線ハヤブサで 走ってる
- 2 NS：俺のハヤブサ 宇宙のかなた 夢は広がる 頑張れよ
- 3 Ss：夢は広いと 言うがまずは 東京からハヤブサに 乗りませんか
- 4 NS：ふたり仲良く ハヤブサ乗って 宇宙旅行を しましょうよ

この掛け合いは、審査席から「ハヤブサ」というお題が出されている。つまり少なくとも掛け合いで開始すべき話題は最初から決められている。ただし Ss と NS とで「ハヤブサ」が何を指しているのかについて齟齬が生じている。2019

年は大会に先立つ 7 月に小惑星探査機「はやぶさ 2」が小惑星リュウグウへのタッチダウンに成功したことが大々的に報道されており、おそらく審査員としては小惑星探査機的话题を意図して「ハヤブサ」というお題を出したのだと思われる。ところが Ss はおそらくこのニュースあるいははやぶさ 2 のことを知らなかったようで、1 首目では東北新幹線を走っていて秋田県民も東京に行く際には乗るためおなじみの新幹線「ハヤブサ」と鳥の「ハヤブサ」に言及している。これに対し 2 首目は「俺の」をつけることで、Ss の出した「ハヤブサ」とは異なる（おそらく審査員の意図した）「ハヤブサ」を話題に持ち出した。続く 3 首目で Ss は 2 首目にある「夢は広い」を響鳴させつつ話題を自分の知る「ハヤブサ」に引き戻す。最後に 4 首目で NS はどちらのハヤブサとも取れる使い方で「ハヤブサ」を反響させる。つまり、歌詞例 4 では全体を通して同じ「ハヤブサ」という語が響鳴しつつも、その内容をめぐって駆け引きが行われているのである。

次の掛け合いも、「虫」という語が意味を変えながら、あるいは掛詞的に用いられながら反復して用いられている。

歌詞例 5：2019 年金澤八幡宮伝統掛唄大会 3 回戦 4 組目より

- 1 IY：虫がいっぱい コップの中にも 飲んでしまった どうしようよ
 2 MS：喉が渴いて コップの虫見ぬ IY 先生よ 生徒にも虫ついでる
 3 IY：俺の生徒は 女性ばかり 虫を払うのに 追われている
 4 MS：トイレに行っても 虫にさわられ 世の中の男に 騙されぬよう
 5 IY：虫も食わぬような 顔してるが 案外あの子らは 食わせものよ
 6 MS：俺の見方は 先生と違う 悪い虫には 気を付けて

まずこの掛け合いの背景には、図 2 に見えるように掛唄のステージにはコップと水が用意されていること、IY が N 大学で音楽教育を教える教授で、この年までの 10 年間毎年、大半が女子から成るゼミ生を連れて掛け唄大会に参加しており、とりわけ 2019 年は連れてきたゼミ生が全員女子学生だったこと、そして 2 回戦で IY の学生が地元の歌手と「虫が大の苦手だ」という掛け合いをしていたことがある。掛け合いの 1 首目で IY は文字通り虫の話始めるのだが、2 首目で MS は同じ「虫」を 2 度使いながら慣習的な比喻表現に基づく異義同語を駆使することで話題を虫から「虫＝悪い男」にずらしている。さらにこの掛唄で面白いのは、5 首目でもう一つ慣用句に基づく「虫」が登場することである。全体としてこの掛唄では 3 種類の「虫」が、歌詞例 4 とは異なり互いに誤解を生むことなく響鳴し続けている。そして小規模の響鳴を通じて掛け合い間の結束性が生み出されるとともに、「虫」という語の持つ意味合いが（それぞれは慣習的なものであるものの）創造的に広げられている。

4. 基盤的響鳴としての仙北荷方節

小規模な響鳴の事例を見ていると、あたかも掛唄には常にこうした響鳴が見られるように思われるかもしれない。だが実際には、言語表現上特に響鳴がないこともままある。典型的には歌詞例3の2首目と3首目のように、話題の変わり目では明確な響鳴関係がなくなりがちである。さらに、次の事例のように掛け合いとして成立していないような掛け合いでは響鳴がほぼ見られなくなる。

歌詞例6：2009年金澤八幡宮伝統掛唄大会1回戦7組目より

1 Ts：今日は吉日 日柄も良いし なにかよろずの 喜左右祝い

2 Ne：若い力に 背中押されて 挑戦しました 掛けの唄

3 Ts：今日は N 大学は 息子もお世話になったし これもなにかの 縁かと思いました

4 Ne：聞いて覚えた 荷方の節よ なかなか思うように 唄えません

この掛け合いはどちらも初出場の二人によるものである。1首目は仙北荷方節の決まり文句であり、相手が掛唄歴の長い歌い手であれば「決まり歌詞では 掛けにはならぬ あれ程教えても まだまだだめか」(2019年金澤大会1回戦3組目)などと返されることもあるが、この例ではひとまず Ne も掛唄大会初出場の意気込みを歌っている。3首目で Te はどうにか即興で歌詞を出している。3首目にある「N 大学」は IY 研を指しており、これは2首目の「若い力」と同一の対象を指している点で結束性はあるが、「響鳴している」というほどの繋がりはない。そして4首目は3首目とはほぼ無関係に「初めてだからうまく歌えない」という Ne の現状をそのまま歌詞にしている。

全体を通じてまったく響鳴がないという掛け合いも珍しいが、以上見たように全体を響鳴関係が貫いているという例も珍しく、ほとんどの掛け合いは一部の首間で響鳴が小規模に見られると言ってよい。つまり、掛唄は確かに(主に小規模な)響鳴によって歌詞が創発されているのだが、それを基盤としているとは言えない。だが、掛唄全体で常に響鳴しているものがある。それは、仙北荷方節という旋律である。

掛唄における仙北荷方節は現在「現代化」(Hughes 2008)を遂げて標準となっている仙北荷方節のスタイルとは異なっている。現代の仙北荷方節には三味線と尺八の伴奏が付き、「ハァ～」という歌い出しではじまり、歌詞が決まっているのみならずかなり細かい節回しまで規範化が進んでいるが、掛唄の仙北荷方節には基本的にこれらが無い(「ハァ～」は歌う人もいたが)。節回しも個々の歌い手で微妙に異なっており、審査員たちも歌い手たちもそれでよいと考えている。とはいえ旋律の大枠は全員同じであり、掛唄大会ではおおむね同じ旋律が

100 回以上繰り返されることになる。

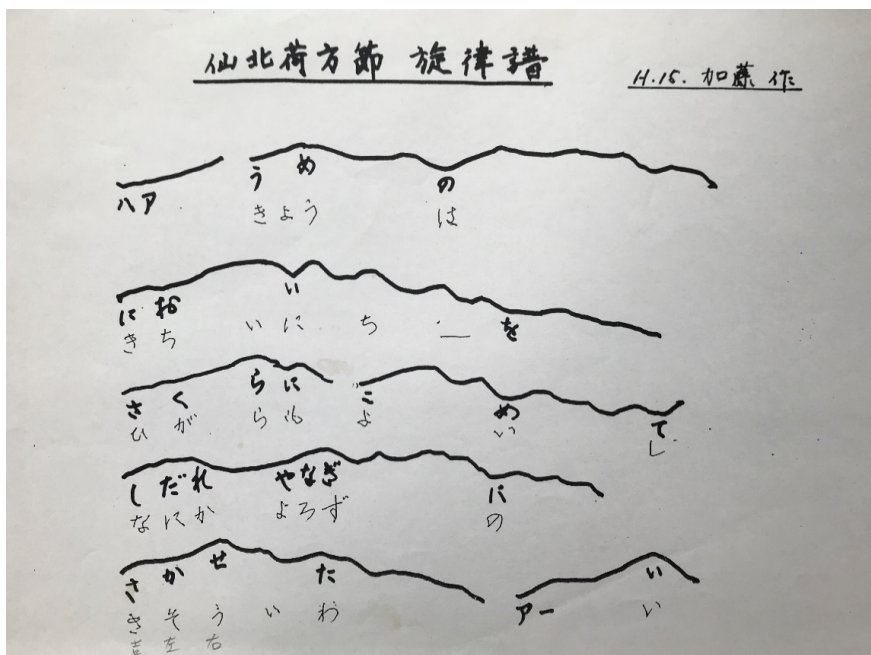


図4. 金澤八幡宮伝統掛唄保存会が作成した指導用旋律譜

掛唄ではこの、仙北荷方節の節回しが掛唄の枠組みとなっている。ここまで上げてきた歌詞の事例をみてもわかるように、掛唄ではほとんどの場合7・7・7・5に収まっていない。つまり規範的な言説とは異なり、掛唄は「拍」を埋めるスロット（つまり「リズム的な場面」）がもともとあり、そこに言葉や音を当てはめていく」（片岡 2020: 17）ようにはできていない。そもそも掛唄の仙北荷方節は拍節のはっきりしない、フリーリズムに近い歌である。では仙北荷方節はどのような形で掛唄の「枠組み」となっているのか。その手掛かりとなるのが図4に示した簡略な旋律譜である。この旋律譜は金澤八幡宮伝統掛唄保存会の会長を2013年6月まで務めた加藤氏が作成したもので、おおまかな旋律の上下とともに、仙北荷方節の決まり文句の入る位置が記してある。掛唄の「枠組み」の単位はおおむね図4の一行に相当する。ある熟練の歌手によると7・7・7・5は実際には7モーラをさらに分けて3・4・4・3・3・4・5のつもりで歌うと綺麗に旋律にはまるのだが、実際図4の譜面を見るとそのような単位が確認できる。そして、実際の歌唱では字余りが発生した場合、この枠組みにはまるように音節を入れる位置を調整するのである。

ちなみに、大会（特に金澤八幡宮伝統掛唄大会）では時折掛唄をよく知らない地元の参加者が参加してくることがある。次の例はそうした掛け合いが発生した時のものである。

歌詞例7：2013年金澤八幡宮伝統掛唄大会1回戦7組目より

- 1 SZ:今日もめでたいこの日に 金澤八幡宮様にて この田園の秋の稔りを 豊作になりますように そして台風の来ないように 八幡様を守ってくれますと思います
2 OH:こういう唄っちは 歌えぬけれど 何とかぼつぼつ ついてゆく

この掛け合いではSZが（金澤と同じ市内だが隣接する町である）横手で冬の梵天祭りで歌われている横手梵天唄の旋律で歌っている。SZによると氏は掛唄の旋律がてっきり梵天唄と同じだと思っていたとのことであるが、予想外の旋律で歌われた熟練の歌い手OHは明らかに戸惑った歌を返している。なお、SZは翌年も参加してきているが、その際は相手に「ここの掛唄仙北荷方 あなたの唄は何荷方」とたしなめられており、それ以降は参加してこなかった。

なお金澤八幡宮伝統掛唄大会の記念誌によると、掛唄はかつてさまざまな節で歌われていたのが、大会として形が整えられていくなかで1920年ごろに仙北荷方節と定められたという（加藤編 2007）。旋律が異なっても掛け合うことは不可能ではなかったようだが、揃っていた方が都合が良かったようである。

以上から、掛唄ではまず仙北荷方節の響鳴が歌詞を創発していく基盤となっており、その上で小規模の響鳴を駆使しながら相手に対する唄を生み出している、と考えられる。

5. おわりに

最後に、本発表が Hymes 的な意味で民族詩学であることを述べておきたい。民族詩学を提唱した人びとのひとりである Hymes は、民族詩学をアメリカ先住民のようなマイノリティの語りを聞き、「声」を取り戻させるための政治的試みとして打ち出していた（Hymes 1981, Blommaert 2009）。掛唄を歌う人びとは決してマイノリティではないが、掛唄はもう地元でも歌える人が10名いるかどうか、しかもその大半が今や70代以上という、かなり厳しい状況になっている芸能である。地域の伝統芸能として認識はされており、近年は地元の観光ポスターにも登場してはいるが、80年代までは神社の境内を埋め尽くすほどいたという熱心な聴衆はもはやほとんど存在しない。秋田県は今でも比較的民謡の盛んな地域であるが、現代的な民謡とはかけ離れた姿になっている掛唄はそうした民謡好きからも「別物」として扱われており、一般の地域住人からももはややさほど興味を持たれていない。そして本発表の動画を見た人の多くがそうだと思うが、

聞きなれていない人が掛唄を聞いても歌詞を聞きとることもままならず、文字がなければいまひとつ面白さが伝わらない。そうした意味で、掛唄という芸能自体がマイナーな存在になっている。

本発表はこの、今や聞きとられることのない「声」を、語用論的な概念を駆使しながら深く聞き取れるようにしようという試みであった。本発表で掛唄に興味を持っていただける方がもし増えたら望外の喜びである。

参考文献

- 安倍完爾・佐々木孝治・小西弘蔵・畠山善栄・熊谷暁編 2003.『即興詩人の郷一全県かけ唄大会五十回記念誌』六郷町かけ唄保存会.
- 石橋雅人, 伝康晴 2001.『談話と対話』東京大学出版会.
- 片岡邦好 2020.「はじめに：日常の中のポエティクス概観」片岡邦好編『ことばの詩 生活の詩 社会の詩—日常の中のポエティクス (愛知大学人文社会学研究所主催シンポジウム報告書)』愛知大学人文社会学研究所. pp.3-24.
- 加藤義男編 2007.『金澤八幡宮伝統掛唄秋田県無形民俗文化財指定 15 周年記念誌』金澤八幡宮伝統掛唄保存会.
- 崎田智子・岡本雅史 2010.『言語運用のダイナミズム—認知語用論のアプローチ』研究社.
- Blommaert, Jan. 2009. *Ethnography and Democracy: Hymes's Political Theory of Language. Text & Talk*. 29(3): 257-276.
- Bublitz, Wolfram. 2011. "Cohesion and Coherence." In J. Zienkowski, J-O. Östman and J. Verschuren (eds.) *Discursive Pragmatics*. John Benjamins. pp. 37-49.
- Du Bois, John W. (2014) "Towards a dialogic syntax." *Cognitive Linguistics* 25(3): 359-410.
- Halliday, Michael A. K. and Ruqaiya Hasan. 1976. *Cohesion in English*. Longman.
- [ハリデイ, M. A. K.・ハサン, ルカイヤ (安藤貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭 翻訳)『テキストはどのように構成されるか—言語の結束性』ひつじ書房.]
- Hughes, David W. 2008. *Traditional Folk Song in Modern Japan: Sources, Sentiment and Society*. Global Oriental.
- Hymes, Dell. 1981. *In Vain What I Tell You: Essays in Native American Ethnopoetics*. University of Pennsylvania Press.
- Jakobson, Roman (1960) "Closing statement: Linguistics and poetics." In Thomas A. Sebeok (ed.), *Style in language*. Cambridge, MA: MIT Press. 350-377.